

令和5年度 第2回

「松本市認知症施策推進協議会議事録」

松本市認知症施策推進協議会事務局

令和5年度第2回松本市認知症施策推進協議会次第

日時 令和6年1月25日（木）
午後1時30分から
場所 市役所本庁舎3階大会議室

1 開会

2 あいさつ

3 会議事項

(1) 報告事項

ア 令和5年度事業進捗状況について

【資料1】

イ 第9期介護保険事業計画・高齢者福祉計画について

【資料2（別冊）】

(2) 協議事項

令和6年度事業計画（案）について

【資料2（別冊）】【資料3】【参考資料1】

(3) その他

チームオレンジまつもとの活動について

（河西部西地域包括支援センター・南部地域包括支援センター）

4 連絡事項

5 閉会

(1 開会)

事務局 午後1時30分、開会を宣言した。(委員13名のうち10名の出席があり、協議会設置要綱第6条第2項に基づき、会議は成立した。)

(2 あいさつ)

会長 認知機能とは、判断力、理解力、記憶力、計算力、言語能力など人間の持つ知的な機能の総称であり、社会生活を送るうえでの重要な能力である。現在の超高齢化社会における認知症診療においては、ワクチン接種会場等でも認知症の高齢者が多数いらっしゃる事が確認できる。接種側の対応に時間がかかり、ご家族の負担も大きくなっている。このように認知症の方の御家族の介護に対する労力は、身体的にも精神的にも多大なものとなっている。社会全体で認知症の方へどう対応していくか考えていく時代になっていると思う。

国の認知症施策大綱にある、認知症の発症を遅らせ認知症になっても希望を持って日常生活を過ごせる社会を目指し、認知症の人や家族の視点を重視しながら共生と予防を車の両輪として施策を推進するという認知症に優しい社会の形成を促進していきたいと考えている。

(3 会議事項)

事務局 設置要綱第6条第1項に基づき会長が議長となった。

議長 議長は報告事項の説明を求めた。

事務局 資料1に基づき令和5年度事業進捗状況について説明した。

事務局 資料2に基づき第9期介護保険事業計画・高齢者福祉計画について説明した。

(意見・質問)

議長 議長は報告事項について、委員から意見・質問を求めた。

議長 意見がないことを確認し、議事を進めた。

(協議事項)

議長 議長は協議事項の説明を求めた。

事務局 資料2、資料3、参考資料1に基づき令和6年度認知症事業計画(案)について説明した。

(意見・質問)

議長 議長は協議事項について、委員から意見・質問を求めた。

議長 チームオレンジまつもと宣言した団体はどういったところか。また、昨年度の本会でもご相談したが、道迷い高齢者に対する対応としてシールの作成ということについてはどのように考えているか。

事務局 チームオレンジまつもと宣言をした団体は、既存の団体であり、チームオレンジといった国の背策が始まる前から、認知症の方や物忘れのある方も一緒に活動していた団体である。みなお互い様で支えあいながら、楽しみながら、一緒に活動しているもの。

シールについては検討や現在導入している自治体の情報を収集している。結論から申し上げますと、現段階で市として導入の方向は考えていない。現在、導入している自治体から情報収集を行う中で導入してもなかなか利用につながらないという情報をいただいている。道迷い高齢者の対応については日頃からのネットワークや、警察との連携を含めた様々な方法がある。現在はそのような方法について検討している段階であり、シールの活用までは至っていないというのが現状。

委員 自分の担当地区で市民の方を対象に、病院の先生から認知症の講座を開催した。病院の先生から認知症についてわかりやすくご説明していただいて、自分の団体としても今後そういった講座等を他機関と連携を図りながら企画していければ良いと思う。

委員 認知症に関する研修会の連携開催について他委員に意見を求めた。

委員 市民向けには行っていない。主に専門職向けに行っている。来年度は地域に向けてもう少し取り組んでいければいいと考えている。

委員 昨年は他団体との共催で映画の放映とトークセッションという形で当事者の方にもお話しいただいた。50名ほどが集まったが、大変良い反応が得られた。特に映画の放映は集客に対して力を発揮したと思う。

先日、所属団体内で情報交換を行ったところだが、図書館を活用した広報活動を行っているという情報があった。図書館を活用した広報活動は持続的に提供できるという点があり良いと思う。

研修会の開催について話をする対象者を考えてみた。自分たちも支える側にも支えられる側にもなる可能性があり、それだけ認知症は身近なものになってきている。そのように考えると、広く市民に向けたものになるかと思う。我々はやはり当事者の方々の声を聴きたいと思うが、ご本人には知られたくないと

いう気持ちもある。その偏見や誤解、認知症に対するイメージを払拭し、認知症の方々にとって偏見のない社会に変えていくための取り組みになれば良いと感じている。数年前に松本市で当事者から一緒に活動している方々とどのように助け合いながら活動しているのかという話を聞き、とても身近で我々と変わらないという価値観に変化した。疾患のことなど細かな内容もあると思うが、話をしてくれる当事者の方も増えてきているため、実際に見てもらうことが一番良いと感じている。

議長

市の取り組み内容として人生会議やリビングウィルの周知啓発がある。松本市医師会と松本市地域包括ケア協議会でまつもと版リビングウィルを作成したが、現在松本市地域包括ケア協議会が発展的解消という形でなくなっている状態になっている。松本市地域包括ケア協議会は認知症だけでなく、高齢者福祉に携わる団体が横のつながりを持ってできていた団体だと思うが。現在はこれに代わるシステムがないのではないかと。事務局から何か提案はあるか。

事務局

地域包括ケア協議会が発展的解消をしている。中核市に移行後、社会福祉審議会の高齢者福祉専門分科会という形でそれぞれの立場の方にご参加いただきながら組織を作らせていただいている。地域包括ケアについては、地域包括支援センター職員一丸となり地域づくり関係者と連携を図りながら取り組んでいるところではあるが、課題は多い。新しいものを作るのではなく、現在ある営みを深めていきながら強化させていく方向性の中で実践につなげていきたいと考えている。

委員

共生社会に向けて政策を進めていく上では、行政や医療など各方面が一体となって連携する必要があると思う。団体としては、認知症発症や進行を予防するという観点から令和6年度、7年度からオーラルフレイル予防に力を入れていきたいと思っている。他団体とも協力し、準備を進めているところである。

委員

認知症に対する正しい理解がされていないことと相談窓口が知られていないことが課題であり、広く一般的に参加できるような企画が必要だと思っている。他の委員からもあったが、映画は様々な角度から様々な立場の人が見ることができるようになっている。最近では様々な認知症に関する映画が上映されているため、そういったものを上映しつつ、一般的に知られている認知症本人の方からの講演なども合わせて行ったら幅広く集客できるのではないかと考えた。また、相談窓口が知られていないことについては、専門職が集まっていると困難事例を多く取り扱っていると思われるため、広く一般的なケースを取り扱う場所だという周知をすることで、一人でも多くの方が考え方を知ることができる機会になるのではないかと考えた。また、行政と協議会の構成団体が連携することでさらにお互いの力が発揮できるのではないかと考えた。

委員

本日も地区でオレンジカフェが開催されていた。現在10名ほどのスタッフがいますが、担い手不足になってきている。認知症サポーター養成講座を開催していただき、認知症の理解のある人に担い手になっていただくなどということがないと今後継続していくことが難しくなるのではないかと考えている。物忘れがひどくなっているのは家族も理解しているが、家事ができていることで今は大丈夫だとおっしゃる方がよくいる。そういった人たちもそれ以上進行しないためにもオレンジカフェ等で救っていききたい。

昨年地区で認知症の講演会を開催したところ若い方が来てくれた。今後も若い方に声をかけていきたい。

委員

認知症であるかないかということより、言動などに対してどのように対応するかということが重要ではないかを考えている。子どもに対して、みんなの周りにもこういう人がいるかもしれない、こういう人がいたらこういうふうに優しくしてあげてください、このお話をお父さんやお母さんにも話してみてくださいと話をする中で、子どもの親世代が自分の親について考えたり、近所の人について考えたりすることにつながり、自然と理解が広がっていくのではないかと考えている。自分自身やってみたいと思い学校へ話をしたところ、好印象であった。まだ実行には至っていないが、そういったところで開催するという方法もあるのではないかと考えた。

委員

相談相手や自分の相手をしてくれる人、あるいは居場所というものに飢えている方がいるということを実感している。本来であれば空白の期間を埋めるためにも、生活に近いところで自分を受け入れてくれるような仲間がいる場所に足を運んでもらうことで精神的にも安定し、病気の進行も遅くなると思う。しかしどこにご案内すれば良いか悩むこともある。

先日地域包括ケア等の研修会に参加した際に、困ったときに自分の身近な範囲で利用できるサービスをわかりやすく記載している冊子をお持ちになったかたがいた。そういった冊子に、寂しかったらここへ行くとカフェがあって仲間が迎えてくれるといったような情報を記載しご案内ができるといいのではないかと考えた。

委員

最近受診につながるケースは増えてきているが、一度診察には来るが日常生活がある程度送れているとその後の受診がなく、半年や一年後に困りごとがあって再度受診するというケースがあると感じている。早期診断にはつながって来てはいるが、本人も家族も困っていない場合は、地域資源を案内しにくく、空白の期間が生まれ認知症が進行してしまい、その結果困って再び地域包括支援センターへ相談に行くという流れになっていると感じる。空白の期間を生まないため、どのようなところにつないでいけばよいかということは、結論

は出ていないが悩んでいるところではある。

委員

アルツハイマー月間を受けての取り組みというところで、駅前でリーフレットやティッシュの配布を行っていた経過もあるが、ここ数年そういったことができなくなっている中で、ここにいる関係者で実行委員会のようなものを作り、大々的に取り組めると良いと感じている。

診断後の支援というところで、見かけはそれほど進行していないように見えるが、診断の時には中期以上まで進行しているという方は多いと思う。地域の者からすると、様々な機関が明確になってきているため、ご本人、家族の了解のもと、地域につなげていくということは最低限必要だと考えている。皆さん病状が進行してからSOSを出していくが、そうなる前に周りの様々なスタッフが病気のこと、生活のこと、サービスのことなどにじっくりと関わってけると良いと思っているが、様々な機関や組織があってもそれらがうまく連携できていないのではないかと感じている。地域包括支援センターのほうも地域の隅々まで相談活動に踏み込んだり地域の関係性をつないでいけるような余裕が持てる機関になると良いと思っている。

また認知症サポーター養成講座について、最近はVRを活用した啓蒙活動がある。以前貸していただける機会があり地域の皆さんに体験してもらったが、認知症の人の見える世界が体感で実感できるとのことで好評だった。ただお金もかかる物のため行政として物品の準備など支援していただけると良いと感じた。

事務局

VRに関しては、昨年11月に開催した介護の日のイベントでも実施できている。市単独での実施が難しいものについては県との協力や、この協議会の様々なお立場の方と連携を図る中で、できるだけ実現に向けて努力していきたいと思う。

委員

2点ほどある。まず1点は、認知症予防という言葉が出てくるが、認知症への備えという考え方が大事だと思っている。認知症になった時に受け入れることができなかつたり知られたくなかつたりするかと思うが、認知症についてしっかりと学んでおくことで、早期の診断や地域の仲間の中に入っていくなど、本人が前向きに取り組んでいける可能性を考えると、認知症予防の考え方より認知症に備えることが重要ではないか。

もう1点は、思いやりあんしんカルテについてだが、先日他県でショートステイを利用中だった方が施設から出て行ってしまったというケースがあった。現在の思いやりあんしんカルテは、施設入所者は対象にしていないが、実際に施設から出て行ってしまうと警察の力を借りざるを得ない。施設としてもあんしんカルテに類似したものを作成したいと考えてはいるが、少しでもそういった方々の危機を回避できる体制整備ができれば良いと思う。

事務局

欠席の委員の意見を代弁した。

診断から支援までにかかる時間をいかに短くするかが重要であると思う。在宅の介護現場においても診断を受けることに焦点が置かれ、その後のその方の生活をいかに維持するかという視点での支援が十分ではない状況が多々見られる。在宅においても施設においても、医療と実際のケアの現場がより密接に情報共有をし、認知症の治療が生活の中にあるということへの共通認識を持ち、シームレスなサポートができるような仕組みづくりが必要であると思う。

能登半島地震に関連し開設された1.5次避難所へボランティアに行ってきた。状況が状況だけに、詳細なご本人の情報が少なく、ご本人からの聞き取りも難しいというケースもあった。通常の生活の中でさえ認知症の方の意向を汲み取ることは難しいが、その難易度がさらに上がってしまうと痛感した。災害そのものは予測できないが、どのような状況であっても「認知症だから取り残された」ということが起きないように、平時からの地道な意識改革と取り組みが大事だと改めて思っている。

議長

他に意見がないことを確認し、協議事項について協議会として了承し、議事を終了した。

議長

チームオレンジまつもとの説明を認知症地域支援推進員に求めた。

推進員

毎月3日に地区の公民館でサロンを開催している。参加者はその都度変わるが、多い時は30名ほどが参加している。80代の方が多いが90代の方も参加しており、介護認定を受けている方、少し物忘れが出てきている方もいる。元民生委員や現民生委員など5,6の方が開催の声かけや会費の徴収を行っているが、サロンで行う内容は一部の人が決めるのではなく、参加者が話し合いながら決定している。参加者の中に歌が得意な方がいればその方を中心にカラオケ大会を開催したり、楽器の演奏が得意な方がいれば演奏会を開催したりしている。また、参加者同士で困りごとや学びたいことも話し合い、消費者被害の勉強会やリビングウィルを学ぶ機会を設けるなど、全員参加型のサロンとなっている。

参加者からは、サロンに参加することでみんなの顔が見え安心する、張り合いになる、お互いできないことや物忘れが出てきても、できないところは助け合っていきたいという声が聞かれる。実際に、少し物忘れがあり開催日を忘れていた方がいれば、別の参加者が前日に連絡したり一緒に参加したりということも自然と行っている。認知症に対しても関心が高く、認知症サポーター養成講座を開催、その後実践的な知識や対応なども学びたいという希望から、ステップアップ講座を2回開催し、チームオレンジまつもとの登録を行った。

推進員 地域支援推進員など経験者約10名が花植え、草取り、清掃などの環境整備や施設でのボランティアなどを長期にわたり行ってきたボランティア団体。近年ともに活動してきた仲間が認知症により引きこもりがちになったことで他の仲間が声を掛け合い、ひろば活動やひろば喫茶、サロンなど一緒に参加するようになった。地域の交流の場に参加することで、曇りがちだった表情も豊かになり、認知症の進行を遅らせることにも効果が出てきているように思った。また、一人暮らしで物忘れがあり不安を抱えている方から連絡があった際には訪問して相談に乗ったり、状況によっては地域包括支援センターに連絡をくださったりと日頃から幅広く活動されている。

議長 保健所長にまとめとして、意見を求めた。

保健所長 来年度は、認知症基本法が施行され、国の方針が共生社会ということを中心に進められていくことがしっかりと法律化された。今回、市としても、高齢者福祉計画や事業計画等も含め、新たな核を作りながら認知症施策を進めていく準備を、皆様の協議で進めさせていただくことができたと思う。認知症の方がその人らしく地域の中で暮らしていくという共生社会を目指していく中には、行政、医療、福祉が顔の見える関係で連携体制をとっていき、それぞれの地域を共有すること、また、ご家族や市民の皆様にもしっかりと共有していただくことが必要なことかと改めて認識したところであるため、引き続き皆様にはご協力いただきたい。

議長 他に意見がないことを確認し、議事を終了した。

(4 連絡事項)

事務局 令和5年度の本協議会は本日が2回目で終了となる。来年度の日程調整についてはご相談させていただきたい。

課長 閉会を宣言し、午後3時08分に散会した。